氏　　名	森（もり）　幸子（ゆきこ）
学　　位	博士（芸術学）
学 位 記 番 号	博（芸）甲 第 35 号
学位授与年月日	平成 29 年 3 月 17 日
学位授与の要件	学位規程第 3 条第 3 項該当
論 文 題 目 名	オルタナティブ　フォトグラフィック プロセスとデジタルテクノロジーの融合に よる新しいプリントの可能性 －レンズレスカメラを中心とした作品制作
審　査　委　員	主査　　竹内　一郎
	副査　　櫻木　晃彦
	同　　井上　幸喜

平成28年度宝塚大学博士学位論文審査結果報告要旨

本研究の要旨は以下の通りである。

写真術の発明以来、写真はコミュニケーションのツールとなったばかりではなく、芸術の重要な表現手段の一つになっている。写真表現が多様化している中で、19世紀のクラッシックプリントが見直され始めている理由について、写真史とともに作品制作を通して考察したものである。

本論文の目次は以下の通りである。

第１章　写真の歴史

第１項 カメラ・オブスキュラ（写真鏡）について

第２項 ダゲレオタイプについて

第３項 日本の写真史（きものから洋装へ服飾の変化に沿って）

第２章 写真の中にあるもの

第１項 人間（技法を超えた存在となる）

第２項 自然（人物以外の被写体について）

第３項 人形（人間と人間以外のものとの中間に位置するものとして、日本人の人形に対する概念を含む）

第３章 オルタナティブ・プロセス（古典的写真技法）

第１項 オルタナティブ・プロセスとは

１−１ サイアノタイププリント「青写真」

１−２ アルビューメンプリント「鶏卵紙」

第２項 ピンホールカメラ

２−１ ピンホールカメラの原理について

２−２ ピンホールカメラをつくる

２−３ ピンホールカメラで撮影する

第３項 デジタルネガについて

３−１ デジタルネガをつくる

第４章 古典的技法と現代的技法の総括

第１項 オルタナティブ・プロセスについて

第２項 現代の写真について

第３項 写真表現の新しい可能性について

第５章 作品制作（発表）

終章 研究の総括である。

各章の要旨は以下の通りである。

第１章 写真の歴史では、第１項に映像の起源として、カメラ・オブスキュラについて述べている。第２項は、写真の誕生として、ダゲレオタイプについて述べている。第３項は、日本の写真史をきものから洋服への服飾の変化に沿って論じている。

第２章 写真の撮影対象である「人間」・「自然」・「人形」について論じている。

第３章　作品制作を通して検証を行っている。第１項は、オルタナティブ・プロセス（古典的写真技法）の行程を述べている。第2項は、ピンホール写真（レンズレス）の原理、アナログのピンホール写真機を自作したもので撮影をしている。第３項は、オルタナティブ・プロセスのプリント技法に適したデジタルネガを作成し、デジタルテクノロジーを使用しないネガティブと、適 正値を計ったデジタルネガティブを使用した写真の比較検討をして、その相違について検証を行っている。

第４章　古典的技法と現代的技法の総括として、第１項は、オルタナティブ・プロ　セスについて述べている。第２項は現代の写真について述べている。第３項では、新たな写真術として､ゾーンプレート写真 と、サーモグラフィ写真を取り上げ、これからの写真術の可能性について考察している。

日本では、芸術分野の作品として、あまり前例の無い「ゾーンプレート」の写真術 は、「印象派」のような写真を表現する効果が得られることを実証した。

論文評価の要旨

森氏は、「ピンホール」や「ゾーンプレート」というレンズを使わない、古典的な写真技法に着目した。

近年のデジタルテクノロジーの発達により､それらで撮った写真が｢デジタル･ネガ｣に可変でき、それらは和紙などにも写真として再現できる。

今では忘れられた写真技術が、デジタル技術と融合することで、これまでになかったタッチの写真が制作できることを、実作して見せた。医療機器や光工学分野で輪帯板は使用されているが、芸術分野 での発表は本論文が初めてである。

撮影方法や、印画紙の種類を変えることで、これまで見たこともないような写真が再現される。印象派の絵画に近いタッチの写真が生まれたりもする。

デジタル技術自体は、東京通信大学名誉教授・竹田辰興氏の開発によるものだが、アーティストの立場で、試行錯誤を重ね、新しいタッチの写真を提示できたことは森氏の

業績である。
　アナログ技術とデジタル技術を融合させた先駆的な写真作品群が、本論文の主成果である。今後さまざまに撮影や印画紙などの条件を変えることで、さらに多様性を持つ成果である。その地平を切り開いたことが、まず評価に値する。

　副論文（本論文の種別はＢ）では、写真技術史の変遷を説き、その上で自作品の制作過程を丁寧に論じている。自作品に客観的な眼を持って接していることが伺える。
　公聴会には、技法の開発者（厳密にはその一人）である武田氏も出席した。森氏は、武田氏に直接指導を受けて作品制作を行った。竹田氏からは、公聴会での質問等は出なかったが、自らが開発した技法が、アーティストの手によって、人口に膾炙することに目を細められていた。

　作品群の先駆性、多様さ、ボリューム、また副論文の客観性を総合し、審査委員会は全員一致で、本論文が学位授与に相当すると判断した。